

人

問活動のあらゆる場面で、人と人のつながりは大きな役割を果たす。話題となった歴史学者のハリリ氏による『サピエンス全史』を読んで腑に落ちたのだが、人類が地球上で繁栄しているのも、想像力に基づく人々の協力があってこそ、なのだ。でも近年の若い人たちを見ていると、人間関係の様子が、一〇〜二〇年前とは随分変わってきているようである。

以前だと、結構自分勝手な言動をとったりするような学生がいても、周りに包容力があつたか、または本人がわかまえていたのか、大きな問題とはならず、自分たちで何とかまとまっていた。今の若い人たちは、トラブルが生じないようにそれぞれが人間関係に非常に気を遣っているように見える。でもかえって本音がやりとりできない分、ストレスを溜めたり、意外と許容範囲が狭く我慢ができなかつたりして、そのグループが構成員の居場所として適切でなくなるようなことも生じる。現在五十代半ばの私の世代でも、「大人」になるとあまり波風立つことは言わないので、今の人たちは若くして老成しているのかもしれないが、大丈夫なのだろうか。グループとしてまとまる、または協力していくためには、考え方や行動の仕方は当然それぞれの人によって違うものだ、といった前提が、身をもって共有されていて、さらにお互いさまであると思えている必要がある。そうした前提は、若い頃などの経験を通して身につけていく

各 人 各 説

人と人のつながり

東京理科大学 教授

木村吉郎

Kichiro Kimura



しかないように思う。

人は違っているものだという例として、「自閉症スペクトラム」をあげてみる。以前はアスペルガー症候群と呼ばれていたものに近いが、それを含みさらに障害よりも広い概念であり、その特性をごく簡単に要約すると、本田秀夫医師は、「臨機応変な対人関係が苦手で、自分の関心、やり方、ペースの維持を最優先させたい」という本能的志向が強いこと」であると述べている。このように聞くと、性格のようにも思えるが、体質のようなより本質的な違いであり、また「スペクトラム」と呼ばれるように、程度には広い幅がある。本田医師は、一〇人に一人くらいが当てはまるのではないかとしている。

自閉症スペクトラムの人と、そうでない人は、心から共感し合うのは難しいのかもしれない。でも、お互いの特性を良く理解して、それを十分踏まえてつながるようにすれば、チームとしても力を発揮していくことももちろん可能である。人それぞれが、得意なことと安心して頑張れるような環境を作ることがとても大切である。

このように、お互いを尊重しあいながらつながっていくことの大切さは、どのような集団、構成員についてもいえることである。ただそうしたつながりは、お互いがそのような気持ちを持つ必要がある、また構成員の心にある程度余裕がないと醸成していくのは難しい。まずは自分から、という気持ちで心がけていきたい。